



# 暮らす ～森の風ようちえん～

大地にしっかり両足をつけて立ち、手は愛の仕事のために働く。

そんな子どもたちを育てたい。

見えるところ全てを保育資源とし、地域と交流を深め、地域から学び、大人も子どもも共に育っていく場所。

「森の風ようちえん」でお話を伺いました。

## いのちあふれる場所へ

今から20年ほど前、若者が人を殺めるといふ悲しい出来事が何件も起こりました。いじめ、自死、虐待。

「そのような事件は、その子、その人たちだけの問題ではなく、それを生み出してくる背景、社会の問題だと考えられます。と同時に命の感覚が薄れた社会を感じました。」

自分もその社会の一人。そして教育に携わる者として責任を深く感じました。「命は大事だよ。』そんなことしちやだめだよ。」と言つても物事が繋がらないのです。命の重さや感覚は、命によつてしか養えません。大人の知識の切り売りや小手先の技術では間に合わない時代になつてきました。」と嘉成園長。

菰野町は、田や畑、少し行けば山の中にも入っている、自然豊かなところ。そこに引越した園長は、豊かに穂を垂れている田んぼの道を通りながら、「私には、自分の食べるものがつくれない!! どうしよう。」と突然思ったのです。「ご飯を炊くことはできても、お米は、作れない。」  
衝撃を受けて、近所の方に稲作を教えてほしい、田んぼを貸してほしい、と願い出たところ、「20年放置してる田があるけれど、見ておいで。」と言つて下さる方があ

【お話を伺った人】



一般社団法人森の風  
森の風ようちえん

園長 嘉成 頼子さん



保育士 岡 百里子さん

(百里子先生)



保育士 吉澤 礼子さん

(礼子先生)



サポートスタッフ 嘉成 永慈さん  
(永慈先生)

り、見に行くと、そこは2m以上の笹が茂り、小木も生え、もはや田んぼではなく原野でした。身近な人たちに「田んぼやらない」と声を掛け、「やる、やる。」と集まった人たちからは、「先生、田んぼつて言つたよね。こんなの笹林やん。」と。  
地主さんも一緒に草刈り機や重機を使い、嘉成園長たちはカマで笹を刈り、笹の根を掘り起こし、大きな石をどけて、開墾していきました。  
すると、そこに水を引いてきたとたん、どんどん、どんどん水生昆虫が湧き出てきました。ミズカマキリ、タイコウチ、ゲンゴロウの仲間がどんどん、どんどん。  
この様子に園長は感動し、「こっだ。こういうところに子どもたちを委ねたい。本当のいのちのあふれるところに委ねよう。」と決めたと言います。

